

重なり合うヴァタン、ぶつかり合うヴァタン：
アゼルバイジャンの(元)人民作家アクラム・アイリスリとパトリオティズム

本発表では、ソ連時代より活躍するアゼルバイジャンの作家アクラム・アイリスリ(Əkrəm Əylisli, 1937-)を対象とし、(1)パトリオティズム概念、(2)ヴァタン(vətən)という語がもつ「故郷／故国」という複層的な意味合いを手がかりに、「国家の裏切り者」という作家に対する近年の位置付けを再検討した。アイリスリは故郷アイリスを思わせる架空の農村ブズブラーグをめぐる作品群で知られており、これらの作品はソ連時代より高く評価されていた。しかし、2012年に同胞のアルメニア人迫害を描いた小説『石の夢(Каменные сны)』を発表して以降、作家は政府や民間から迫害を受けている。

『石の夢』以降、多くのアゼルバイジャン国民が、アイリスリの「唐突」な「裏切り」を非難し、その「パトリオティズム」の欠如を批判した。それに対して本発表では、現在アゼルバイジャンで主流となっている聖地奪還と結びついた軍事的なパトリオティズム理解を超え、その概念史を辿れば、むしろパトリオティズムこそ、ソ連崩壊前後のアイリスリの創作の一貫性を説明するものであると主張した。政治学者ヴィローリによると、「文化的、言語的、民族的統一性と同質性」¹を擁護するナショナリズムとは異なり、元来パトリオティズムは「ある特定の場所における、その共和政体と、自由に生きることが可能な状態」²を求め、特定の民族や文化を重視しつつも、共通善の実現に重きを置くものであった。「ある特定の場所」における「自由に生きることが可能な状態」とは、まさにソ連体制の抑圧に抵抗し、ソ連崩壊後の独裁や民族対立を批判するアイリスリが求めたものであると考えられる。

一方、アイリスリにとって特権的な「ある特定の場所」の具体的な範囲は精察を要する。本発表では、ヴァタンという語が指示する「故郷／故国」という二つの次元に注目し、この問題にアプローチした。異なる時代のアイリスリ作品の批評において、(1)故郷アイリス、(2)故国アゼルバイジャン、(3)ソ連という大小のヴァタンが、時には重なり合い、時にはぶつかり合うものとして認識されていることを確認した上で、パトリオティズムの議論と接続し、以下の主張を結論として提示した。アイリスリの創作は現実の故郷や故国と直接関連づけられることが多いが、もしアイリスリが原初的な意味でのパトリオティズム—故郷や故国それ自体の称揚ではなく、その場所における共通善—を追求していたのであれば、その創作と現実の諸ヴァタンの間の距離を見直す必要がある。

質疑応答では、本研究の学術的な位置づけの確認、及びアイリスリのソ連時代の創作、評価の現状やアルメニアでの受容等について質問がなされた。コメンテーターの塩野崎信也先生からは、ヴァタン概念には「故郷／故国」という二重の意味が確かにあるものの、基本的には故国の意味合いが強いという、本研究にとって重要な指摘を頂いた。そのほか、アイリスリの故郷アイリスが位置するナヒチェヴァンが、歴史的にアルメニア文化の強い影響下にあり、なかでもアイリスは村の規模が大きく、かつてはアルメニア人の人口がムスリムを凌駕していたという、アイリスリの故郷がもつ歴史的・文化的特殊性をご指摘頂いた。今後はこれらを踏まえて、本研究を発展させたい。

¹ マウリツィオ・ヴィローリ(佐藤瑠威・佐藤真喜子訳)『パトリオティズムとナショナリズム:自由を守る祖国愛』日本経済評論社、2007年、9頁。

² ヴィローリ『パトリオティズムとナショナリズム』12頁。